

槐かい

平成30年4月号

岡井省二創刊

平成三十年四月一日発行 第二十八巻第四号
平成三年九月十八日第二種郵便物認可
通巻第三三二号（毎月一回一日発行）



LED

高橋将夫

雷神の羽織つてゐたるちゃんちゃんこ
ねんねこの外へ手が出て足が出て
雪達磨田んぼ一枚守りをり
向かうから福の神来る枯野かな

雪の野の鴉と闇の夜の鴉

ジャンプして氷上を舞ふ陰陽師

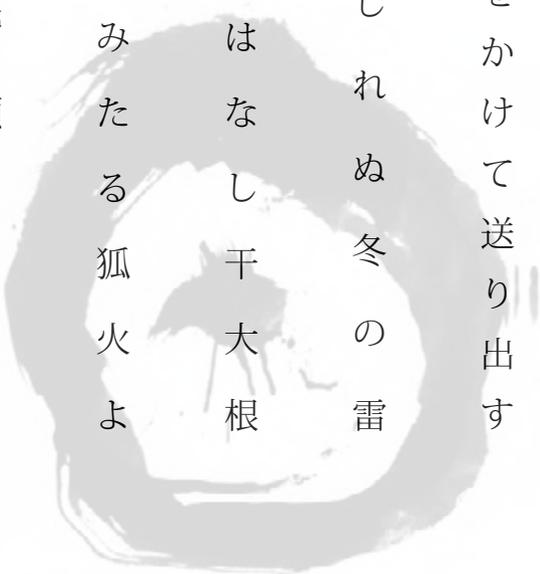
両の手でシヨールをかけて送り出す

難民の声かもしれぬ冬の雷

貧困の絶ゆる世はなし干大根

人混みに紛れ込みたる狐火よ

狐火の列の先頭
L
E
D



槐安集

水野恒彦

鷹盟友遊くの影光となりて宙へ消ゆ

草氷る星のかげらのわれらなり

みほとけの臍はらかんばしき冬渴き

陽光の使ひ果たして菊枯るる

凍鶴の命惜しまず叫喚す

加藤みき

きさらぎやどの枝先もぶつくりと

寒卵矯めつ眇めつ飯の上に

澄み澄みて寒の夜空の高くあり

無駄足は一つもなかり春や春

耳底に吾のこゑあり春の昼

中島陽華

着床体操万全よ日記買ふ

屋久杉の盆いらひをる小春かな

した出せば嬰も舌出すお正月

遠近の灯を甘うして海霧じりの夜

二番目の釦取れたる冬ごもり

竹内悦子

肋骨のやうに焚かれて蓮の骨

忘れもの取りに帰るや桜の芽

素顔にて新年迎ふ鏡かな

大皿に結び昆布と金目鯛

どうしても裏向く蓬莱飾りかな



雨村敏子

白紙に齒朶一枚やお元日
ほんだはら樂の字ころがし遊びける
玄海灘の濤もて洗ふ鰯のかま
くれよんの赤を買ひ足す雪女
耳の奥かゆくて真夜の雪女郎

本多俊子

海の神山の神初霞して
卑弥呼恋ふ耳ひきさく鴟高音
人日や土の匂ひの立ち上がる
凍鶴のしかと魂抱きをり
白鳥と眼の合ひし夜は耳あつし

近藤喜子

明るさを取り出すや割る寒卵
燃え落ちし寒椿まだ燃え足らぬ
凍鶴の一步や以後は思惟に入る
刺すやうな光を掬ふ寒の水
ふくらみくる冬芽や我も変はらねば

瀬川公馨

幣帛を分けてひとりの初詣
麗かな春のはじめのポチ袋
浄瑠璃のさはり柔らか外の雪
深海の鱻を喰らひし男かな
雪んこや死後硬直の生まれり

久保東海司

雲水に熟柿二つを喜捨したる
木の実独楽力の尽きて膝の前
軽口と無口むきあひ牡丹鍋
羽子の音聞かざる巷羽子日和
間を置いて軋む水車や龍の玉

柳川 晋

一年の計の手はじめ寝正月
大股に歩く旗チイ抱パオ獸チヤイナドレス狩
地に平和峽なみに寒天干しあがる
ビッグバンそもはじまりは寒やいと
にらみ鯛笑ひ放蕩児帰る

熊川暁子

鳥獸戯画うさぎが何か申しをり
この火種逢へる日までは壺の中
新日記ときめく白さありにけり
決断をしてもほどけぬ懐手
霜踏めば崩るるものが胸にあり

寺田すず江

悠久のとき移りゆく去年今年
秒針のいのちを刻む霜夜かな
海の涯火群ほむらにしたり寒夕焼
階をしかと踏みゆく寒土用
樟大樹 唳りやうりやう唳として初鴉

岩下芳子

ポケットの手を握りしめ大試験
買初のおまけに付いて来し小判
手袋の片方探す G P S
おん僧の輪袈裟を外しぼたん鍋
ミラノ巻習うて帰る初句会

近藤紀子

ひるがへる星条旗に満つ淑気
白頭の鷺に乾杯延命酒
ジャンバラヤ待つ間の汽笛おぼろかな
雪積むごとベニエジャンバラヤアメリカ南部名物炊き込みご飯にかける粉砂糖
氷点下駐機場の燈にじみベニエオリンズの四角の揚げパンをる

岩月優美子

未来へと続くこの道初日の出
初夢や宇宙遊覧いつの日か
神宿る源流涸るることはなし
寒林や竹割る音の響みたり
冴ゆる夜の音無き音を聞いてをり

竹中一花

年玉の歩いてきたる風の角
矢を放つ袴に雪や聖観音
杜氏去ぬ里に待ちたる安寿姫
楽茶碗黒黒とあり灯の温し
氷踏む櫛稲田姫の社かな

前田美恵子

伊勢の方向きて鳴きをり初鴉
神杉に春のことぶれ幣揺るる
二月の神籬淡き日を集め
春立つや紅白饅頭貫ひたる
律するを忘るる春の炬燵かな

中田禎子

三日はや渦巻く雲に龍の立つ
青銅の獅子の口より寒の水
長旅の高麗茶碗冴返る
日を負ふやレンガの壁に冬の虻
早春やギター教則本の文字



槐市集

有松洋子

桃色の雲ひとつ浮く恵方かな
笑ひたくてうずうず正月の子は
初詣鐘の緒を振る強く振る
冬の空楷書のごとくゆるみなし
独り言熱爛にまた独り言

犬塚芳子

生かされて今ここにある返り花
一日が丸く暮れたり寒水仙
鏡餅分け合うて未来あり
松ぼつくり眺めてをりぬ去年今年
大蛤見るも初めて夕餉とす

井上静子

寒鳥ひと際大き朝の声
負けるとは思はぬ心地歌かるた
真冬なり楠大木に濤の音
冬夕焼色えんぴつを滑らせて
イケメンの僧侶数多や親鸞忌

今井充子

初春や掛け軸たとうあるを知る
初風呂やジャグジー泡と遊びをり
赤と黄の千両活けて供へたる
喰積の並ばぬ卓に向ひたる
正月やテレビ三昧乍ら族



岩田洋子

霜柱夜の深さを測りをる
露の臺巢立つ子供の眩しかる
風邪心地慈母観音の膝元に
注連作骨太十指皆使ふ
真竜の罫とみるや冬夕焼

植木戴子

六年生袴姿の寒稽古
蠟梅の花の雫やよその庭
土の上に狸の匂ひありにけり
大寒や湾処の波の鉛色
大鍋や冬菜の灰汁をとつてをる

江島照美

糟糠の妻にはあらず久女の忌
一声の染み渡りゆく寒鴉
触るる手に悴む心震へをり
ポインセチア愛の讃歌に酔うている
雪礫当てられ顔に笑み浮かぶ

岡田桃子

橙にてこずる嫁や床の間飾り
賀状待つ家に先駆けマドレーヌ
雪の竹祖母の時代の女達
雪しまく駅舎たちまち遠景に
暁闇の五体に受くる寒の雷

久保夢女

豪勢な贈り物なり初日の出
盛大に膨れし餅よ少し酔ふ
雪もよひ犬夢みしか声もらす
キシキシと踏めば雪なく朝なり
先導もしんがりも居る鴨の群

後藤マツエ

凍てし夜やコンビニ二明り人を呼ぶ
灯籠の火袋で蝶凍ててをり
白寿すぎまだ鳴く亀に会はずなり
われ一人他に影なし寒の浜
晩年に恋残しおく六十路かな

槐集

高橋将夫選

木枯をとつ捕まへて道を聞く
竹原 久保 夢女

冬晴やポンと此の身を抜けしもの
立ち位置は自づから成る冬木立

去年今年どこにも透き間なかりけり

人間が褒めねば冬の海荒るる

寒梅や余生まだまだ風の中
大阪 平野 多聞

逃げ出せぬ渡世の道や雪女郎

針穴を通す糸にも淑気満つ

枯蓮や呪文めきたる纏れやう

初日の出わが陋屋を照らしけり

神の打つ燧石より初明り
有松 洋子

初旦大和にかをる蘭奢待

ふらふらになりてしぶとき独楽一つ

手毬つく手足欲しがるこけしかな

涙にも結晶あるや雪の降る

胸の結ぶ絆や猿廻し
大阪 江島 照美

初夢のグレードアップしてをりぬ

初暦はや来年の話題かな

喜びは他人と同じ初詣

破魔矢にて貫かるるは歡喜かな

縮緬の波ゆつたりと初日の出
藤田美耶子

五線譜の音符はらりと風花す

大仏の背に重き荷のごと深雪かな

たゆたひて鴨のかじれる金閣寺

古稀の峰登りつつまる初茜

浮世絵のやうな山河や初茜
岡崎 吉田 順子

つくばひの天女舞ふ影竜の玉

冬薔薇明日咲くものと散るものと

手にありて潮の香りの神馬藻ほんだはら

海原の風読み取りて尾白鷺

銀河往来

◆槐集観照

高橋将夫

人間が寝めねば冬の海荒るる

久保 夢女

冬の間も寝めれば荒れないという。自然も人と同じで、大切にしなければ。自然あつての人間だから。一方、人間がいなければ、自然は何の意味も持たないとも言える。

〈木枯をとつ捕まへて道を聞く〉、〈冬晴やボンと此の身を抜けしもの〉、〈立ち位置は自づから成る冬木立〉、〈去年今年どこにも透き間なかりけり〉、どの句にもこの作者ならではの着眼、発想、感性がみられ、オリジナリティーに富んでいる。

寒梅や余生まだまだ風の中 平野 多聞
「風の中」が実に意味深長。さて読者は「寒梅」と「風の中」からどんな余生を想像するだろうか。

〈逃げ出せぬ渡世の道や雪女郎〉の句にはこの作者ならではの着眼があり、〈針穴を通す糸にも淑気満つ〉の句には作者ならではの繊細な感性が窺える。

神の打つ燧石より初明り 有松 洋子
初明りが神の火打石からであるとは、いかにもこの作者らしい発想。神は宇宙の真理。

〈ふらふらになりてしぶとき独楽一つ〉はどこかけなげで、共感の持てる一句。最期は胡麻を播る状態になって倒れる。

初夢のグレードアップしてをりぬ 江島 照美
夢がグレードアップする。だんだんエスカレートする。つい

にはへ破魔矢にて貫かるるは歡喜かな」となるのかもしれない。ともかく、めでたい。

五線譜の音符はらりと風花す

藤田美耶子

音譜が譜面から抜け出して、まるで風花のように宙を舞う光景が目に見えぬ。

〈縮緬の波ゆつたりと初日の出〉の「縮緬の波」、〈大仏の背に重き荷のごと深雪かな〉の「大仏の背の深雪」、〈たゆたひて鴨のかじれる金閣寺〉の「鴨がcaじる水面の金閣寺」、どの句からもこの作者ならではの感性が伝わってくる。

〈古希の峰登りつつまる初莖〉は精神の風景。めでたい。

冬薔薇明日咲くものと散るものと

吉田 順子

この作者らしい穏やかな精神の風景。他の四句からもほのぼのとしたぬくもりが伝わってくる。

鶴の舞 愛の光をちりばめし

柴田 靖子

「愛の光をちりばめし」の措辞が素晴らしい。

鏡餅があるくまるく家の長 中 貞子
鏡餅がまるで家長のようにとっかかど坐っている。どうやら今年も家族円満で安泰だ。

寒暄にあり人の世の二番底

三木 亨

株価の話ではない、人の世の話。寒が明けて幸せに転じたからといっても、安心はできないようだ。二番底に注意。

〈以下略〉